

Rep  
ort

## 身近な自然の観察・記録活動 石神井川緑道版

2021.4.23

一人ひとりの自主活動 だれでも参加できます

活動：月2回(第二木曜日・第四金曜日)10:00より(雨天中止)  
コース：帝京大学付属病院北詰・御成橋たもと → 金沢橋  
問合せ・連絡先：090-8646-9757 木村松夫 com-matchan@hotmail

5月の石神井川観察は5/13(木)、5/28(金)  
10:00 帝京大学病院北側の御成橋たもと出発



## 石神井川緑道は夏の入口

4/23の観察活動は気温20℃を超える初夏の様相。春の植物はオオイヌノフグリを除いて、ホトケノザもヒメオドリコソウもすっかり影を潜め、木々の葉も緑を濃くしています。その緑に浮かぶようにベニカナメモチの赤い芽出しが美しいコントラストを作っていました。4/18に行われた板橋区立エコポリスセンターの「かんきょう観察員全体説明会」ではこの観察活動に参加希望の方が現れて参加者は5名に、植物に詳しい人もおいでになり、とても勉強になりました。



# 黄色の花オンパレード どうして黄色が多いの？



写真の良し悪しを別にして表ページの写真の光景が強烈な印象を与えてくれるのは木々の緑とベニカナメモチの芽出しの赤が補色（色相が反対）の関係にあるからです。



一方、足元に咲いている野の花の色を見てみると圧倒的に多いのは黄色です。葉のもともとの色は「紅葉」に見られるように赤系が基本、それに炭酸同化作用を行う緑系が加わり、花が黄色だとすると、植物は自然に「色の三原色（青緑（シアン）・赤紫（マゼンタ）・黄（イエロー）」を備えているといってもよいでしょう。



その中で黄色はいちばん明るい色。人間にとっては冬には暖かさを感じさせ、夏にはさわやかさを感じさせる色で、四季を通してもっとも好感的な持てる色でもあります。



だから、植物は自ら花を黄色にしたのか、その逆か？ はたまた関係ないか？ これ、木村の独自、というか独善的な見解。でも、カラープリンタ



のインクカートリッジでいちばん減りが早いのも黄色（イエロー）だとすると「黄色の研究」は取り組む価値あり。誰かさん、「花の色と人の関係」を研究してみませんか？

写真は上の左から右へ、アカミタンポポ、タンポポ交雑種、オキザリス（カタバミの園芸種）、オッタチカタバミ、カタバミ、ウマノアシガタ、ハハコグサ、コメツブツメクサ、ノゲシ